

— 軍医さん私を楽にしてください —

福田 芳生 作・画



これは 1944年6月のサイパン島の例。重傷を負った日本兵捕虜を助けるため、血漿を点滴する米兵。同様な光景は太平洋戦争の激戦地、レイテや硫黄島、沖縄の戦場でも珍しくない事ではなかった。

これは 1944 年 6 月のサイパン島の例。重傷を負った日本兵捕虜を助けるため、血漿を点滴する米兵。同様な光景は太平洋戦争の激戦地レイテや硫黄島、沖縄の戦場でも珍しい事ではなかった。

## 乾燥血漿

朝の明るい日射しのもとで、山田軍医は意識を取り戻しました。驚いたことに、そこは米軍の野戦病院だったのです。傷口がまだズキズキ痛むので、体を起こすことができません。

何と、ベッドの脇には少佐の襟章を付けた軍医が心配そうに立っているではありませんか。目をさましたことを認めた軍医は「あなたは今、栄養剤の点滴が必要です」と語り、「英語が分かりますか」と尋ねるので、「日常会話なら不自由しません」と答えました。

「それは幸いでした。あなたは、砲弾の破片を腹部に受け、大出血をして気を失っていたのです。あなたを発見した衛生兵の応急処置がなければ、たぶんだめだったでしょう」と話しました。

山田軍医は恐る恐る「どのような応急処置がなされたのですか」と質問したところ、「あなたは乾燥血漿をご存知ですか」と言うので、「いえ、全く知りません。それは一体何ですか」と正直に答えました。少佐は「そうですか、では簡単に説明しましょう」と傷口の具合を調べてから、次のように話しました。

「我々は、この戦争が始まった時、おおよそどのぐらいの負傷兵が出るのか計算しました。この負傷兵の命を救うために、最も必要とされるのは、輸

血用の血液です。国民の献血を使用するにしても、こんな熱帯の戦場まで長時間かけて、血液を運び保存することは、ひどく困難です。それを解決するため、我が国の医学者が苦心の末、ようやく製品化したのが乾燥血漿です」

軍医少佐は「ちょっと待ってください」と言って、医薬品庫から点滴用のガラスビンを持ってきました。そして、「このガラスビンの中にある黄色味を帯びた結晶がそうです」と指差し、ビンを左右に振って見せました。すると、サラサラと砂粒が擦れあうような優しい音がします。それはタナバタ祭りの笹の葉が風に揺れる音にひどく似ていました。



### 応急処置の様子

患者を見回りに来た少佐は、「だいぶ元気になりましたね。傷の回復が順調で安心しました」と言って、山田軍医の命を救った応急処置の様子を詳しく話しました。それは以下のようなものです。

ジャングルの<sup>くさむら</sup>草叢に、腹部から夥しい血を流して倒れている山田軍医を発見したトムソン衛生兵は、相手の手首に触れると、かすかに脈拍を感じる

ことができました。

すると、トムソン衛生兵は、息絶えた日本兵の傍に転がっていた小銃を拾い上げました。そして遺体の腰から銃剣をはずし、小銃の先にカチリと装着しました。それを地面にグサリと突き立てたのです。

次に乾燥血漿の入った大形のガラスビンに生理的食塩水を注入しました。ビンを3～4回激しく振ると、先ほどの小銃に吊しました。そして、意識を失っている山田軍医の腕を調べ、静脈に輸血用の注射針を刺し込みました。

するとどうでしょう。死人のような土気色していた頬がたちまちバラ色に変わり、脈拍も強くなってきます。トムソン衛生兵は、それを見届けると担架兵に連絡し、大急ぎで仲間の所に戻りました。



### 山田軍医の叫び

この話にじっと耳を傾けていた山田軍医は、黙り込んで大粒の涙を流しました。そして、突然大声で叫びだしたのです。「私は殺人者です、お願いですから銃殺してください、いえ絞首刑で結構です。自分は恥ずべき捕虜でもあるのです」

驚いた少佐は、「どうしたのですか、なぜあなたの命を奪わなければならないのですか。まさか捕虜になったから、死にたいというのではないでしょうね」と問い返しました。

すると山田軍医は「少佐殿、お願いです。私の話を聞いてください。その結果については覚悟しています」と言うではありませんか。以下に山田軍医の話を書きましょう。

## 地獄の島レイテ



山田軍医を乗せた輸送船団がフィリピンのレイテ島に到着したのは、太平洋戦争も末期に近い昭和19年(1944年)秋でした。

米軍が大挙してレイテ島に上陸したので、それを迎え撃つために急ぎよ編成された寄せ集めの部隊です。5隻の輸送船団は錆だらけの老朽化した貨物船ばかりで、速度が遅く、しょっちゅう動力装置の具合が悪くなります。通常ならとっくにスクラップになっている代物です。

途中で米潜水艦の待ち伏せ攻撃に会い、何と4隻も沈んでしまいました。

山田軍医の所属する中隊200名は、ようやくのことでレイテ島北部の海岸にたどり着いたのです。将兵は懸命に物資を海岸に陸揚げします。

そこへ米軍機が襲いかかり、バリバリダアダーンと激しい銃爆撃を繰り返します。たちまち物資の山から炎が吹き上がります。銃砲弾が熱で次々と爆発し、破片が周囲に飛び散ります。そんな危険を冒して、何とか10日分の食糧と少量の弾薬を確保することができました。

でも、軍医にとって命の次に大切な医薬品と手術器具を再び手にすることはありませんでした。

山田軍医の背囊には、わずかなモルヒネとマラリアの特効薬キニーネの錠剤、何本かの注射器があるだけです。それで200名の兵士の命を守らなければならないのです。胸のポケットには捕虜になった時、自殺するための青酸カリの小ビンが入っていました。

昼でも暗いジメジメしたジャングルに身を潜めて、何日過ぎたでしょうか。ニワトリの卵大の握り飯1個、日によってカンパン3枚が支給されます。それが1日の食事のすべてです。皆肋骨が浮き出てきて、体力は日増しに低下していきます。

飢えた兵士たちは雑草の他に、ヘビ・トカゲ・ミミズ・カタツムリと、何でも口に入れました。でも、そんな御馳走にありつけるのは、極く稀なことだったのです。

兵士の潜むジャングルに米戦車が近づいて、激しく砲撃するようになりました。

## 軍医さん私を殺してください

ある日、勇敢な工兵が地雷を抱いて、米戦車のキャタピラーを爆破しました。片腕を失いながらも、友軍陣地まで這い戻ってきた兵士は、傷の痛みを耐えかねて、目に一杯涙を浮かべ、「軍医さん、お願いします。楽にしてください」と懇願します。

山田軍医は「馬鹿者、そんなことができるか、これが最後のモルヒネだ」と言いながら、鎮痛剤を打ってやりました。

そして、手拭いで腕を固く縛って止血しました。手ぬぐいはたちまち血で真っ赤に染まります。輸血なんて、戦争の当初から日本軍は全く考慮していません。乾燥血漿を実用化した米軍とは雲泥の差です。

野戦病院とは言っても、負傷兵はただ横になっているだけです。死体置場と少しも変わるところがありませんでした。死亡すれば、名誉の戦死として片づけられてしまいます。

先ほどの兵士は、薬の効き目が薄れたのでしょうか、再び激しい痛みを襲われます。「軍医さん、早く楽にしてください」と声を振り絞って懇願します。周囲の戦友たちも、「お願いします」と声を揃えて言うではありませんか。

山田軍医は「うーん、そう言われても」と苦しそうな顔をします。そして、意

を決したように胸のポケットから青酸カリの小ビンを取り出し、粉末を血まみれの工兵の水筒に投入しました。「おい、これが末期の水だ、靖国神社で会おう」と言って、口に含ませました。兵士の最期の言葉は「お母さーん」でした。

死亡した兵士の小指を銃剣で切り取って、空き缶に入れました。もう兵士たちには、遺体を埋葬する体力も残っていなかったのです。小指の入った空き缶をつる草で腰に結びつけます。そうすると、移動するうちに肉が腐って骨だけになるという訳です。

悲惨なジャングルの逃避行を続けている時、1発の砲弾が山田軍医の近くに落下しました。鋭く尖った破片が軍医の腹部を切り裂きました。

激しい出血のために、軍医は気を失ってしまったのです。山田軍医はここまで一気に話し終えると、今までの緊張が解けたのでしょうか、深い眠りに落ちました。近くに、自殺防止のための監視兵がいます。





## 軍医の使命

この山田軍医の一件は、すぐに米軍士官たちの間で問題になりました。緊急会議が開かれ、「ジャップがそんなに死にたいというなら、死なせてやればいいじゃないか」、「同胞の貴重な血液は、我が軍の兵士の命を救うためにあるのだ、野蛮な日本兵に与えるだなんて、断じて容認できん」、「軍医と衛生兵を直ちに処罰すべきだ」と非難の声が上がりました。

じっと話を聞いていた軍医少佐は、やおら立ち上がると「負傷兵には敵も味方ありません。まして人種や国境も存在しません、軍医の使命は負傷兵の命を救う、そのことのみにあります」と強調しました。

「御承知のように、山田軍医の行為は人道に反するものです。しかし、医薬品も無い、食糧も無い、では降伏すれば良いではないかと考えるでしょう、我が軍ではそうです。皆さん、今我々が戦っている日本の軍隊では降伏すること、まして捕虜になることは死罪に相当するのです。では、傷の痛み悶え苦しむ負傷兵をどうすれば良いのですか。そんな極限状況下で、誰が山田軍医の行為を責められますか」と言って席に着きました。



## 米軍大佐の英断

長い沈黙の後に、年配の大佐が静かに立ち上がり、「我々は文明国の一員です。アメリカ市民の尊い献血が乾燥血漿として前線に送られ、それが有効に使用されたこと、日本の軍医の行為が例え法に触れるものであっても、立場を変えれば肯定できるのではないのでしょうか」と静かに語って、会議場を後にしました。

この年配の大佐は、元ミネソタ州の私立大学教授で、哲学を担当し、学生に命の尊さについて熱心に説いていました。教授は第一次世界大戦の折、陸軍少尉としてヨーロッパに派遣され、ドイツ軍の毒ガス攻撃に直面しました。

戦場で血を吐いて苦しむ兵士や酷たらしい死体の山を目にして、深い悲しみに沈み、生きていることが辛くなったそうです。

それからというもの、命の意味を深く考えるようになり、哲学者として生きる決心をしたと聞いています。



## 復員した山田軍医

レイテ島から復員した山田軍医は、佐倉町で外科医院を開設し、名医として町民の信頼を得ていました。ある日、新聞を広げると、九州の離島で村民がお金を出し合って診療所を建てたのですが、医師不在で大変困っているという記事が、目に飛び込んできました。

何日か考えた末、ようやく家族の同意を得て、離島の診療所に赴き、村民の治療に専念しました。「どうして先生のような腕の良い方が、こんな田舎にやってきたのですか」と人に問われると、「病人の苦しみを除くのが、私の使命です」と静かに語っていたそうです。

噂によると、85歳でこの地で亡くなった山田医師のお墓は、遺言どおり村民の手で島の南端、遥かなレイテ島の方角を指す小高い丘の上に建立されたということです。 - おわり -

### <著者からのお願い>

私の父親はかつて軍医として、南方戦線の野戦病院に勤務していました。そこでガダルカナル、ニューギニア方面から撤退してきた多数の日本兵を見たそうです。その惨状と言ったら、とても言葉にできない程ひどいものだったと語っています。

私の想像では、アウシュビッツの囚人と同様な、それを上回るレベルでしょう。

それを幼少時から何度も聞かされ、精神的なショックを受けたものでした。創作童話「軍医さん私を楽しませて下さい」は、その話を土台にし、実際に南の激戦地から生還した元兵士へのインタビューを通じて、描いたものです。

大変苦しい内容ですが、この小冊子を手にして、家庭や学校で命の尊さについて、皆で話し合うきっかけになれば、筆者にとってそれ以上の幸いはありません。

### <著者紹介>

福田 芳生(ふくだ よしお)

1941年4月四街道で生まれました。私の住む千葉県北部は、日本一の化石産地と言っても過言ではないでしょう。そこで育った筆者は、まさに化石少年でした。中学生の頃から洋書を開いて、独自に古生物学を勉強しました。

都内の大学卒業後、医大で解剖学を学び、人体ばかりか動物の身体の仕組み、進化について研究しました。

医学博士号を取得した後、千葉県立衛生研究所に勤務し、河川の環境問題に取り組ました。その間、早稲田大学教育学部で学生達に古生物学を教えました。私の著書の1つ、古生態図集は600ページを超える大著ですが、全国の古生物学者を目ざす学生達の愛読書になっているとのことです。

2018年7月記す。

「軍医さん私を楽しんでください」

作、表紙絵 福田 芳生

発行日 平成30年7月14日

発行者 四街道市立図書館 千葉県四街道市大日396

※本作品の朗読、配布等、団体での利用には、作者の許諾が必要です。

当館までご連絡ください。 四街道市立図書館 TEL043-423-6443